

オノマトペから多様な身体表現をする幼児と 定型的な身体表現をする幼児

日常保育中にあらわれる繰り返しの動きとリズムに着目して

Young children with diverse body expressions and those with formulaic body expressions
from onomatopoeia

Examination of differences in terms of repetitive movements that appear in daily childcare

村瀬 瑠美

Rumi MURASE

本研究はオノマトペから多様な身体表現をする幼児と定型的な身体表現をする幼児の日常保育中の動きについて、その特徴や差異を明らかにすることを目的とした。多様な身体表現をする傾向のある幼児は、保育中に「はねる・はずむ」動きをよくしており、オノマトペのリズムと動きのリズムを一体化していると考えられた。オノマトペから多様な身体表現をするために、「はねる・はずむ」動きに親しむことが有効である可能性があった。

キーワード：幼児の身体表現 オノマトペ 定型的な身体表現 繰り返しの動き リズム

1. はじめに

幼稚園教育要領「表現」のねらいに、「感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ」(文部科学省, 2018, p.17) とあるように、乳幼児期の表現教育は、本来、子ども^{注1)}が自分なりに表現できるようにすることを目指すものである。これは身体表現であっても同様であり、多様な身体表現の経験は多様な感性や身体性を育む。しかし、本山・西(2000, p.53)は、「多くの子ども達が、例えば花を手のひらの開閉で表現するといったように、定型的な身体表現を行う割合はかなり高く、年齢がすすむにつれ、同じ表現に集中する傾向が強くなる」と述べ、子どもの身体表現が感じたことの自分なりの表現ではなく、定型的な身体表現に移行していくことを指摘している。このことは、日常的な大人のかかわりによって、問いに対する答えのように、子どもの身体表現がインプットされる可

能性を示している。実際、身体表現活動、特にダンスの要素が強い活動では、与えられた振り付けを練習したり言われたとおりに動いたり、大人側からイメージを与え、大人がしてほしい望ましい動きを教えるための活動になっている場合が散見される。自分なりに表現すれば、自ずと多様な表現があらわれるのではないだろうか。なぜなら、自分とまったく同じ感じ方やものの捉え、気づきをする人間はいないからである。つまり、子どもたちが感じたことを自分なりに身体表現していれば、多様な身体表現が見られるはずである。本山・西が指摘するように、多くの子どもが成長とともに同じ表現、定型的な身体表現をするようになっていくが、これを成長に伴う仕方のないことと捉えたり、「身体表現が苦手だから」、「それも個性だから」としてそのままにしたりすることは、逆に、子どもたち自身のそれぞれの感じ方や気づきを軽視していることになるのではないだろうか。子どもた

ち一人一人を尊重し、子どもたちの身体を育んでいくためには、その子なりの身体表現があらわれるように援助することが必要であり、保育者には子どもたちの身体表現を多様に育むための働きかけが求められる。しかし、その子なりの多様な身体表現を導く働きかけを検討する以前に、定型的な身体表現をする子どもが増える幼児期、特に4、5歳になっても多様な身体表現ができる子どもと、定型的な身体表現をする子どもは何が違うのかについて明らかにしなければならないだろう。

2. 先行研究の検討

本研究では、保育者が子どもの身体表現を導く働きかけにつながっていくことを見据えたうえで、多様な身体表現ができる子どもと定型的な身体表現をする子どもの違いを見るために、オノマトベに着目する。子どもの身体表現活動において、オノマトベはイメージと動きを引き出し、多様な身体表現へ導く言葉であると認識されている。しかし、先行研究では、オノマトベに対して定型的でステレオタイプな動きをする子どもが一定数存在することも報告されており(村瀬・寺山, 2020)、オノマトベが子どもの多様な身体表現を導くとは一概には言えない。村瀬・寺山は、5歳児16名に6種類のオノマトベを投げかけ、オノマトベに対する幼児の身体表現を収集した。その中で、オノマトベの意味はわからない、もしくは何も思いつかないが、オノマトベに反応して動くことができるケースがいくつか挙げられている。これは、「このオノマトベはこの動き」といったように、言葉と動きが一对一対応でインプットされていることを示唆していると考えられる。「このオノマトベにはこの動き」と反応している幼児の内部には、オノマトベから感じたことに対するイメージはほとんどないであろう。この場合においては、オノマトベは幼児の多様な身体表現を導く役割を果たしていない。しかし、一方で、同じオノ

マトベから多様で豊かな身体表現をしている幼児もあり、そのような幼児にとっては、オノマトベはイメージを想起するきっかけとして機能しており、身体表現を導く役割を果たしていると言えるだろう。

このように先行研究においても、多様な身体表現との対比で定型的な身体表現が取り上げられてきた。しかし、同じ年齢・生活集団でありながら、なぜ同じオノマトベに対して多様な身体表現をする子どもと、定型的な身体表現をする子どもがあらわれるのかについてはあまり言及されてこなかった。これは、これまでの子どもの身体表現に関する研究・実践の多くは、出現した動きの評価にとどまっていたことが原因であると考えられる。

動きの評価にとどまらない研究では、村瀬・寺山の一連の研究(2020, 2021)があげられる。村瀬・寺山は、幼児はオノマトベからどのように動きをあらわすのか、といった身体表現が出現するまでの過程を検討している。しかし、村瀬・寺山の研究では、身体表現が出現する過程に言及した上で、どのようにしたら多様な身体表現が導かれるのかに主眼が置かれており、定型的な身体表現に関する言及はほとんどない。このような出現した動きの評価のみを行わない先行研究においても、定型的な身体表現については着目されてこなかったと言える。

多様な身体表現ができることは価値あることであり、多様な身体表現がどのようにあらわれるかを検討することは重要なことである。しかし、「はじめに」でも述べたように、子どもの多様な身体表現ばかりに着目し、定型的な身体表現を看過して良いのだろうか。同じオノマトベに対して多様な身体表現をする子どもと、定型的な身体表現をする子どもの違いを看過して良いのだろうか。「私たちのすべての活動や行為(無意識のものも含めて)は、体によってなされ」(庄司, 1990, p.58)るため、身体表現の教育は、表現行為のすべての根本主体である身体の表現を養うことであると言われている。つま

り、得意・不得意を超えて、子どもが感じたり考えたりしたことを自分なりに表現できるような身体を育むことは重要である。また、村瀬(2021)によれば、オノマトペが想起させるイメージは感覚や知覚に近い次元にあり、オノマトペが単体で誘発する身体表現は、創造性のあまり高くない、感覚や知覚したことの素直なあらわれに近いものである。つまり、オノマトペに対する子どもの身体表現は、その子どもの感じ方や世界の捉え方を率直に表現しているものと考えられる。

幼稚園教育要領の「表現」領域の内容(文部科学省, 2018, p.17)には、「生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ」や、「生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする」など、幼児が生活の中で何かを感じることを重視している記載が多く見られる。表現領域に限らず幼児期の教育は、幼児の生活の中での育ち・遊びの中での育ちを大切に、環境を通して行われるものであると述べられている(文部科学省, 2018)。多様な身体表現をする傾向のある幼児と定型的な身体表現をする傾向のある幼児の違いを見る場合にも、その幼児が遊びや生活の中で何を捉え感じているのか、環境にどのように働きかけているのかといった日常保育の中での様子を捉えなければならないと考えられる。

幼児が日常保育の中で何を捉え感じているのかを見る観点として、本研究では「動き」に着目する。子どもの身体は心と言葉と「まるごと一つとなって動き」(庄司, 1990, p.54)、子どもの内面をあらわしている。そして、子どもの身体が動かされるのではなく、思わず動いてしまう動く主体として在るとき、子どもの身体は表現する身体でもあるのである(庄司, 1990)。この、「動かされている身体」とは「定型的な身体表現」をする身体とも考えられるのではないだろうか。幼児の身体が教えられた動きをなぞって動き、そこに感じるものがない場合、そ

れは「動かされている身体」と言えるだろう。しかし、自ら動く主体として動いている身体は、表現する身体となり、「多様な身体表現」を生むのではないだろうか。

そこで、本研究では、オノマトペから多様な身体表現をする幼児と定型的な身体表現をする幼児の違いを、日常保育の中での幼児の動きを捉えることから明らかにすることを試みる。

3. 目的

本研究はオノマトペから多様な身体表現をする幼児と定型的な身体表現をする幼児の日常保育中の動きを比較し、両者の特徴や差異を明らかにすることを目的とする。本研究は以下の2つの課題を設定する。

課題1: オノマトペに対して多様な身体表現をする傾向のある幼児と定型的な身体表現をする傾向のある幼児の日常保育中の動きを観察する際に、着目すべき動きの観点を得ること。
課題2: 課題1で提示された観点をもとに、オノマトペに対して多様な身体表現をする傾向のある幼児と定型的な身体表現をする傾向のある幼児の観察を行い、両者の動きの特徴と特徴的な動きの出現数の差異を明らかにすること。

4. 方法

本研究は、観察対象者を選定し、観察時の動きの観点を得るための「事前実験」(課題1)と、観察対象者の日常保育での遊びや生活の様子を観察した「観察」(課題2)によって明らかにされた。

本研究は5歳児(年長児:5, 6歳)を対象としている。5歳児を対象者として設定した理由は、5歳児は様々なオノマトペに対する意味理解が深まること(佐治・今井, 2013; 鈴木, 2018)、定型的な身体表現の出現度合は発達とともに高くなり、5歳児で最も多く出現する(本

山・西, 2000) ことによる。

1) 倫理的配慮

実験・観察対象となる5歳児の保護者に対しては、文書と園長から口頭で研究の趣旨と実験内容について説明し、代諾者として書面にて同意を得た。なお、同意書には、対象者の名前、代諾者の名前、対象者の生年月日を記載してもらった。筆者以外の分析者に映像を共有する際には、対象者情報は開示せず、映像のみを共有した。なお、本研究はK大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施された。

2) 課題1：事前実験

(1) 事前実験の概要

事前実験の対象者はA幼稚園の5歳児13名(男子4名, 女子9名)である。対象者の選定の際には筆者がA幼稚園の園長に対して事前に研究の趣旨を十分説明し、書面にて同意を得てから行った。日常保育に支障のないよう、夏季預かり保育利用児を対象とすることとした。実験は2021年7月下旬、8月上旬、中旬の計3回、10時から11時半にかけて、A幼稚園1階保育室を実験室として行われた。

実験は1人の対象者に対して10分前後で行われ、オノマトベに対する反応や動きをビデオカメラで映像記録した。対象者は1人ずつ実験室に入室し、6種類のオノマトベ(「くるくる」「ぴょんぴょん」「プーン」「ぴかぴか」「プンブン」)を1試技ずつ、計6試技行った。実験は筆者が実験者となって行った。実験は以下の手順^{注2)}で、クイズ形式で行った。実験方法は村瀬・寺山(2020)を参照した。

手順①：実験者「今から先生が言う言葉を聞いて、その言葉で動いてみましょう」

「じゃあ一つ目いくよ。『くるくる』(例)」

手順②：対象者、動く(動かない場合は③へ)。

手順③：実験者「『くるくる』って何かな？」

手順④：対象者「○○○○」

手順⑤：対象者「正解! 『くるくる』は○○○○

だね」^{注3)}

手順⑥：問いかけに対して対象者の反応を見る。対象者がオノマトベや動きに関する話を始めたら、会話に応じる。

手順⑦：まだ動いていない場合、「『○○○○』で動いてみようか」と対象者に動きを促す。

(2) 観察対象者の選定

対象者13名の映像記録から得られたデータは、以下の手順で分析され、観察対象者が選定された。分析方法は鈴木ほか(2002)、村瀬・寺山(2020, 2021)を参考にした。

①オノマトベのイメージ(手順④)と動き(手順②⑦)のどちらもあらわれた試技を筆者が抽出した。

②抽出された試技の一つ一つに対して、手順④で対象者が発言したオノマトベに対するイメージと、手順②⑦であらわれた動きを言語化した。言語化されたイメージと動きは、対象者ごとにフォーマットに記入された。

③抽出した試技の映像を、筆者を含めた3人の研究者^{注4)}で共有した。映像を共有する際に2)の手順で得られたフォーマットを同時に共有した。

④筆者を含む分析者3人それぞれで、ある一つの身体表現が「多様な身体表現」か「定型的な身体表現」かどうかを判断し、フォーマットに記入した。どちらかに決しがたい場合には「どちらも言えない表現」と記入した。判断の際、身体表現のどこから、なぜそのように判断したかといった理由も一緒に記入した。

⑤3人の分析者の判断と判断理由を合わせ、ある身体表現が「多様な身体表現」か「定型的な身体表現」か「どちらも言えない表現」なのか、最終判断・決定をした。3人の分析者の判断が割れた場合には議論し、筆者が筆頭分析者として最終判断をした。

⑥最終的に判断された「多様な身体表現」、「定型的な身体表現」、「どちらも言えない表現」

がいくつ見られたかを数えた。あらわれた身体表現のうち半数以上が「多様な身体表現」であると判定された対象者 2 名（多様な身体表現をする傾向のある対象者：以下、a グループ）、半数以上が「定型的な身体表現」であると判定された対象者 2 名（定型的な身体表現をする傾向のある対象者：以下、b グループ）の計 4 名を観察対象者として選定した。

(3) 事前実験によって得られた動きの観点

3 人の分析者の判断理由から、多様な身体表現を行った対象者は、オノマトペの語のリズムと動きに見られるリズムが同期していることが言及された。また、実験中には単発の動きで終わるのではなく、オノマトペを言いながら同じ動きを繰り返す様子が観察された。動きが繰り返されながら誇張されていく対象者も見られた。そこで、繰り返しや反復する動きがオノマトペから多様な身体表現をする幼児の動きの特徴ではないかと仮説を立て、日常保育の中で着目する動きの観点とした。

3) 課題 2：観察

(1) 観察対象者

事前実験で選定された計 4 名の観察対象者の詳細は表 1 のとおりである。

表 1. 観察対象者

No.	対象者	性別	年齢	グループ
1	A	女	6 歳 1 か月	グループ a 多様な身体表現をする傾向のある対象者
2	B	女	5 歳 5 か月	グループ a 多様な身体表現をする傾向のある対象者
3	C	女	6 歳 2 か月	グループ b 定型的な身体表現をする傾向のある対象者
4	D	女	6 歳 - か月	グループ b 定型的な身体表現をする傾向のある対象者

対象者 A, B はグループ a、多様な身体表現をする傾向のある対象者である。対象者 C, D はグループ b、定型的な身体表現をする傾向のある対象者である。対象者 D の月齢が不明となっているのは、対象者 D の保護者から得た研究同意書には対象者 D の生年月日が記載されていないためである。対象者 D が実験中に「6

歳になった」と発言したことから、「6 歳 - か月」と表記した。対象者 D の保護者からは生年月日を聞き出すことはしなかった。

観察対象者は選定の結果、女子のみとなった。選定された対象者が全員女子であったことには意図はなく、本研究では性差に言及しない。

(2) 観察の概要

観察は 2021 年 11 月、1 週間に 1 回のペースで計 4 回行った。1 回の観察は約 2 時間半であった。イベントサンプリング法、非交流的観察法で観察し、観察対象者の遊びや生活の様子をビデオカメラで映像記録した。筆者が観察者として観察を行った。観察方法は湯浅 (2015) を参照した。

(3) 分析方法

観察記録の分析は、以下の①から③の手順で実施された。

①データのテキスト化、コーディング

得られた映像記録をテキスト化し、質的分析ソフト Maxqda2022 (22.1.1) を用いて対象者の動きをコーディングした。コーディングは他の体育研究者 1 名^{注5)} (以下、体育研究者) と共同作業で行った。実験で得られた観点から、繰り返しの動き・反復する動きを抽出し、さらに、保育者や誰かにやらされているのではなく、自らが主体で動いた (自らの意志で動いた) と考えられるものをコーディングした。繰り返しの動きとは、動きの始まりから終わりまでを 1 つの構造として見たとき、この構造が何度も繰り返されることによってなされる動きであると定義した。なお、「歩く」「走る」動きは、動きの繰り返しによって移動を行う動きだが、日常保育の中ではほぼ常に行われているため、分析から除外した。

一つの動きに複数のコーディングを可能にした。その際、どの対象者が動いているのかを明確にし、Maxqda 上で対象者とコードが紐づくように、「対象者」コードを作成した。

②コードのカテゴリ分類

得られたコードを体育研究者とKJ法によって分類した。得られたコードを付箋に書き出し、グループの統合・再統合を繰り返し、合意形成がなされるまで議論し、まとまりを生成した。このまとまりを「カテゴリ」とした。

③グループ間の比較

Maxqda2022のコード間関係ブラウザ機能を用いて、対象者ごとのコードの生起数を算出した。その後、グループ間でカテゴリごとコードの生起数を比較し、考察した。

5. 結果

1) 場面とコード分類、得られたコード数

観察によって得られた場面数は71、総テキスト数は159243字であった。「動き」は10種類126コードに分類された。

「動き」のカテゴリとコード分類、各コードの具体例は、表2のとおりである。「移動する動き」「その場の動き」の2カテゴリが得られた。

以下、それぞれのカテゴリについて説明する。

(1) 移動する動き：25コード

ある動きを繰り返しながら移動する動きである。前述のとおり、「歩く」「走る」は除外している。

「スキップ」はスキップしながら移動する動きである。7コード得られた。

「ギャロップ」は体を進行方向に向けてツース

テップで移動する動きである。6コード得られた。

「サイドステップ」は体を進行方向に対して90度横にしてツーステップで移動する動きである。3コード得られた。

「変わった移動の仕方」は膝を内向きにしてつま先を床に叩きつけながら移動する、膝立ちのままバウンドしながら進むなど、特に名称のつけられない動きの繰り返しによる移動の動きである。9コード得られた。

(2) その場の動き：101コード

その場で繰り返される動きである。

「はねる・はずむ」は跳ねたり跳んだりといった小さなジャンプをその場で繰り返す動きである。45コード得られた。

「ふる」は自分の腕や脚などの身体部位をその場で振る動きである。18コード得られた。

「ゆれる」は身体全体か上半身を前後左右にその場で揺らす動きである。10コード得られた。

「振動する」は身体全体か上半身をその場で震えさせる動きである。5コード得られた。

「ばたつかせる」は自分の腕や脚などの身体部位をその場で激しく速く振る動きである。5コード得られた。

「ものをふる」は手につかんだものをその場で振る動きである。「ものをふる」のみが、何かものを操作する動きである。18コード得られた。

表2. 「動き」のカテゴリとコード分類・コードの具体例

観点	カテゴリ	コード	数	具体例
繰り返しの動き	移動する動き	スキップ	7	スキップをして移動する
		ギャロップ	6	体を進行方向に向けてツーステップで移動する
		サイドステップ	3	体を進行方向に対して90度横にしてツーステップで移動する
		変わった移動の仕方	9	膝を内向きにしてつま先を床に叩きつけながら移動する など
	その場の動き	はねる・はずむ	45	跳ねたり弾んだりなど小さなジャンプをその場で繰り返す
		ふる	18	自分の腕や脚などの身体部位をその場で振る
		ゆれる	10	身体全体か上半身を前後左右にその場で揺らす
		振動する	5	身体全体か上半身をその場で震えさせる
		ばたつかせる	5	自分の腕や脚などの身体部位をその場で激しく速く振る
		ものをふる	18	手につかんだものをその場で振る

表 3. 「動き」のカテゴリやコードの生起数

観点	カテゴリ	コード	対象者 A	対象者 B	対象者 C	対象者 D	グループ a 合計	グループ b 合計
繰り返しの動き	移動する動き	スキップ	1	0	1	1	1	2
		ギャロップ	3	1	1	1	4	2
		サイドステップ	2	1	0	0	3	0
		変わった移動の仕方	1	3	4	0	4	4
	その場の動き	はねる・はずむ	12	27	1	2	39	3
		ふる	1	13	0	2	14	2
		ゆれる	0	9	1	0	9	1
		ばたつかせる	0	4	0	0	4	0
		振動する	0	3	1	0	3	1
		ものをふる	6	3	4	4	9	8

2) グループ間の比較

表 3 は、「動き」のカテゴリやコードの生起数を、対象者ごと、グループごとで分けて示したものである。

「移動する動き」カテゴリのコードには顕著な差が見られなかった。もともとカテゴリ全体のコード生起数も多くはないが、グループ a とグループ b の差は大きくても 3 であった。

「その場の動き」カテゴリでは、すべてのコードでグループ a の方がグループ b よりコードの生起数が多かった。「ものをふる」がグループ a で 9、グループ b で 8 と一番差が少なかった。ただし、「ゆれる」「ばたつかせる」「振動する」については、対象者 A の生起数は 0 であり、対象者 B の生起数が他の 3 人に比べて多いために、グループ間に差が出ている。「はねる・はずむ」のみが対象者 A で 12、対象者 B で 27、対象者 C で 1、対象者 D で 2 のコード生起数となった。よって、グループ間で差があると言えるのは「はねる・はずむ」コードであった。

ここから、オノマトベから多様な身体表現をする傾向のある対象者は、定型的な身体表現をする傾向のある対象者に比べ、日常保育中に「はねる・はずむ」動きを多く行っていることが明らかとなった。繰り返しや反復する動きが、オノマトベから多様な身体表現をする幼児の動きの特徴ではないか、という仮説は、繰り返しの動きの中でも、「はねる・はずむ」動きが特徴であるという形で立証された。

6. 考察

結果から、オノマトベから多様な身体表現をする傾向のある対象者は、日常保育中に「はねる・はずむ」動きをよく行っていることが明らかとなった。よって、ここからは「はねる・はずむ」動きに焦点を当てることとする。

「はねる・はずむ」動きは、リズムに乗って踊ることのポイントであると言われている(村田, 2012)。リズムとは「事象の系列が単位を作って反復連続するようにまとめられる特有の体験」(佐々木, 2012, p.73)である。つまり、リズムはその本来の意味において、反復、繰り返しを内包している。よって、繰り返しの動きはリズムミカルな動きであるとも言える。本研究が対象としているのは、幼児の多様な身体表現であり、リズムに乗って踊ることではないが、オノマトベから多様な身体表現をした幼児が、「はねる・はずむ」などの繰り返しの動き、つまりリズムミカルな動きを多く行っていたことは着目すべき点であると考えられる。そこで、ここからは、リズムに乗って踊ることを手がかりに、オノマトベから多様な身体表現をする幼児について考察を進める。

まず、リズムに乗って踊ることについて説明する。リズムに乗ることについては様々な研究がなされ、諸説あるが、村瀬・寺山(2022)によれば、リズムに乗って踊っているとき、踊り手は絶え間なく交互に音楽のリズムと動きのリズムを意識することによって、音楽のリズムと

動きのリズムを同時に、同じものとして感じている。そのうえで踊り手は自らの動きのリズムを変化させたり、音楽のリズムを生み出すような感覚を得たりできる。このように音楽のリズムと動きのリズムを一体化しながら踊ることが、リズムに乗って踊ることである。音楽のリズムとは、音楽の時間構造の一要素であり、音楽の中に出現し、聞き取られることで捉えられるものである。動きのリズムとは、人間の身体運動に出現し、見られ感じ取られることで捉えられるものである。この2つのリズムが踊り手の中で一体化することでリズムに乗って踊ることができるのである。

音楽のリズムが聞き取られることで捉えられるものであるとすれば、オノマトペのリズムも同様に、「聴覚から得るリズム」であると言えることができる。

鷺田(2012)は語としてのオノマトペが表象するものが概念や意味ではなく、音という感覚的素材であることに言及し、オノマトペの持つリズムと身体について言及している。鷺田(2012, p.147)によると、「オノマトペはその語感と拍子とをうまく縊りあわせて、発話の中にしっかりしたリズムを作り出していく」。つまり、オノマトペは語感と拍子を反復し、撥音と促音を組み合わせることでリズムを作り出す^{注6)}。このように、オノマトペはリズムをもって身体の感触や状態を表現する語である。また、オノマトペはただリズムによって感触や状態を表現・再現するだけでない。オノマトペと身体行動のリズムは互いに深く組み込まれているため、オノマトペを聞いたり発したりすることによって身体の振動に刻みが入られ、その刻まれた振動がまた反復され、リズムが生まれるという。つまり、オノマトペを聞いた人間の身体感覚にオノマトペのリズムが浸透し、人間の身体の中でリズムが反復しながら、新たなリズムを生むのである。生まれた新たなリズムは、語として発されることもあれば、動きを喚起することもある。よって、オノマトペが内包する語のリズム

は、「聴覚から得るリズム」であり、動きのリズムでもあると言えるだろう。

以上から、村瀬らの論と鷺田の論を合わせて考察する。村瀬らの述べるリズムに乗って踊ることに照らし合わせて考えると、オノマトペから多様な身体表現をする幼児は、聴覚から得たオノマトペのリズムと、自分の身体の動きのリズムが一体化している状態となっているのではないだろうか。鷺田が述べる、オノマトペを聞いた人間の身体の中でリズムが反復し、新たなリズムを生む現象は、リズムに乗っている踊り手が「自らの動きのリズムを変化させたり、音楽のリズムを生み出すような感覚を得たり」することと似た現象とも考えられる。オノマトペを聞き、オノマトペのリズムを聞いた幼児が多様に身体表現できるとき、幼児の身体の中ではオノマトペのリズムが反復し新たに生成されながら、自らのあらわした動きも同時に感じられ、さらに動きが変化しながら反復されていくのではないだろうか。つまり、オノマトペのリズムと動きのリズムが一体化すると、オノマトペから多様な身体表現が生まれる可能性があると考えられる。本研究の事前実験において、オノマトペから多様な身体表現を行った対象者が、オノマトペの語のリズムと身体の動きのリズムが同期しているように言及されたこと、オノマトペを言いながら同じ動きを繰り返し、動きを繰り返しながら誇張していく対象者も確認されたことは、この考察の根拠となると考えられるのではないだろうか。オノマトペは単語であるため、連続的に発声しない限り、音楽のようにある程度の時間、動きながら常に聞き取れるものではない。しかし、自らオノマトペを言い続けることで、幼児にとっては発声しながらオノマトペを聞き続けることになっていたのではないだろうか。一方、オノマトペのリズムを聞き取っても、リズムが身体の中に浸透し、新たに生成されなければ、動き出せたとしても、動きを変化させながら反復することができない。この場合にあらわされた動きは、定型的な身体表現に

なる可能性がある」と推察される。

オノマトベから多様な身体表現をする傾向のある対象者は、日常保育の観察において「はねる・はずむ」動きを多く行っていた。この「はねる・はずむ」動きはオノマトベに対して行われたものではないが、日常的にはねたりはずんだりする動きをよく行うことと、多様な身体表現のあらわれには関係があると考えられる。動きのリズムは運動することによってしか体験できない（浅田，1985）ため、日常的にはねたりはずんだりといったリズムカルな動きに親しむなければ、どんなにオノマトベのリズムが捉えられたとしても、動きのリズムと一体化せず、多様な身体表現を生み出すことを妨げる可能性があるからである。よって、日常的に「はねる・はずむ」動きに親しんでいる幼児は、自然と動きのリズムが育まれていると考えられる。以上から、オノマトベから多様な身体表現が導かれるためには、日常的に「はねる・はずむ」動きに親しむことが有効であると推察される。

7. まとめ

本研究はオノマトベから多様な身体表現をする幼児と定型的な身体表現をする幼児の日常保育中の動きを比較し、両者の特徴や差異を明らかにすることを目的とし、以下の2つの課題を設定していた。

課題1：オノマトベに対して多様な身体表現をする傾向のある幼児と定型的な身体表現をする傾向のある幼児の日常保育中の動きを観察する際に、着目すべき動きの観点を得ること。

課題2：課題1で提示された観点をもとに、オノマトベに対して多様な身体表現をする傾向のある幼児と定型的な身体表現をする傾向のある幼児の観察を行い、両者の動きの特徴と特徴的な動きの出現数の差異を明らかにすること。

本研究から得られた知見は以下の4点である。

- 1) オノマトベから多様な身体表現をする傾向のある幼児は、オノマトベから定型的な身体表現をする傾向のある幼児に比べ、日常保育中に「はねる・はずむ」動きを多く行っている。
- 2) 幼児の中でオノマトベのリズムと動きのリズムが一体化すると、オノマトベから多様な身体表現が生まれる可能性がある。
- 3) オノマトベのリズムを聞き取っても、身体の中で反復し、リズムが新たに生成されなければ、動き出せたとしても動きを変化させながら反復することができず、定型的な身体表現になる可能性がある。
- 4) オノマトベから多様な身体表現が導かれるためには、日常的に「はねる・はずむ」動きに親しむことが有効である可能性がある。

8. 課題と展望

本研究では、オノマトベから多様な身体表現をする幼児は、日常保育の中で「はねる・はずむ」動きをよく行っていることが明らかになったが、他の繰り返しの動きで差が見られなかった原因を明らかにすることはできなかった。また、本研究では動きの出現数にのみ着目しており、どのような場面でのどのように出現したかといった、あらわれ方には着目していない。これらの点については、今後の検討課題としたい。

また、本研究では各グループで対象者が2名ずつと少なかつたため、得られた知見は限定的なものである。しかし、2名ずつと少なかつたことによって、観察は綿密に行われ、対象者の主体的で自然な動きのあらわれを観察できたと考えられる。今後、データを増やし、多様な身体表現をする幼児と定型的な身体表現をする幼児について検証を進めていきたい。

注

注1) 本研究において「子ども」と表記する際は、就学前の子ども、乳幼児を指している。

「幼児」と表現した際は、満1歳から就学前の子どもを指している。

注2) ①から⑦の手順の中で、③の質問をする場面や、⑦の動きを促す場面では、実験者は対象者が答えた語を反復・確認することにとどめ、誘導をしないように留意した。また、①から⑦の手順の中で、対象者が実験に関係のない話を始めた場合は、会話に応じた。

注3) 対象者が回答したオノマトベのイメージに対して、実験者はどんな回答でも「正解！」と返した。本来は正解・不正解はないが、クイズと称して行っているためと、正解と言うことでやる気を引き出そうという意図がある。また、対象者が「わからない」と言ったり、首を横に振るなどしたりした場合は、「パスする？」と問いかけ、回答せずパスすることも選択できるようにした。

注4) 分析当時、筆者の舞踊研究歴は本研究実施時で7年、幼児への舞踊指導歴は8年である。分析に携わった2人の研究者は、体育研究者と舞踊研究者である。体育研究者の体育研究歴は5年、児童への運動指導歴は7年である。舞踊研究者の研究歴は5年、幼児への舞踊指導歴は7年である。

注5) 分析当時、カテゴリ分類に携わった体育研究者の体育研究歴は5年、児童への運動指導歴は7年である。

注6) 鷺田(2012, p.139) はリズムについて、「有徴のものと無徴のもの絶えざる交替を運動として持続させること。ここにリズムが生まれる」と述べている。この点で、オノマトベによる音の重ねはリズムの原初の形であると鷺田は述べる。鷺田は著書の中で、山崎(1983)のリズム論を引きながら、有徴のものと無徴のもの絶えざる交替が運動としてあらわれるのは、それらが「不在」を組み込んでいるからであり、「不在」から「忘れてる」という意識状態とリズムの関係を導くが、本研究の範疇からは逸

脱するので言及しない。ただし、意識状態とリズムには深い関係があると考えられる。村瀬らの述べるように、リズムに乗っている踊り手は、音楽と動きのリズムのどちらを能動的に意識しているか(どちらを意識していないか)の絶え間ない繰り返しによって、音楽と動きのリズムの一体化を感じる。オノマトベのリズムが意識状態に作用するとすれば、オノマトベがリズムに乗って踊っている際の踊り手の内部で起こっているような作用を引き起こすことは、ここからも推察できる。

文献

- 浅田隆夫(1985) 動きのリズムあそびの基本原
理. 浅田隆夫・畠山トミ編著, 動きのリズ
ムあそび. 学術図書出版, pp.1-6.
- 文部科学省(2018) 幼稚園教育要領.
- 本山益子・西洋子(2000) 幼児期の身体表現の
特性Ⅱ—身体表現と認識との関連—. 舞踊學,
23: 53-64.
- 村瀬瑠美・寺山由美(2020) 身体表現活動にお
けるオノマトベが幼児に想起させるイメージ
と動き: オノマトベの性質・意味内容に着目
した実験から. 体育学研究, 65: 35-52.
- 村瀬瑠美・寺山由美(2021) 幼児がオノマトベ
から想起するイメージと動き: イメージと動
きの関係と〈自分〉概念に着目して. 日本女
子体育連盟学術研究, 37: 1-16.
- 村瀬瑠美(2021) 幼児がオノマトベから想起す
るイメージとあらわれる動き. 令和2年度筑
波大学人間総合科学研究科 博士論文.
- 村瀬瑠美・寺山由美(2022) 保育者養成課程の
リズムダンス授業における学生のダンスのリ
ズム認識の実態と指導のポイントに関する研
究. スポーツ運動学研究, 35: 103-119.
- 村田芳子編著(2012) 新学習指導要領対応 表
現運動—リズムダンスの最新指導法. 小学
館.

- 佐々木玲子 (2012) 子どものリズムと動きの発達. バイオメカニズム学会誌, 36(2) : 73-78.
- 庄司康生 (1990) 感性と表現の育つ基礎 (1) 心身の健康. 岸井勇雄・小林龍雄・高城義太郎・朽尾勲編, 表現 I 感性と表現. チャイルド本社, pp.53-66.
- 鈴木裕子・西洋子・本山益子・吉川京子 (2002) 幼児期における身体表現の特徴とその援助の視点. 舞踊學, 25 : 23-31.
- 鷺田清一 (2012) 「ぐずぐず」の理由 第3版. 角川選書.
- 山崎正和 (1983) 演技する精神 第3版. 中央公論社.
- 湯浅阿貴子 (2015) 幼児のゲーム遊びに生じる「ずる」の実態と仲間との相互交渉による意識の変容. 保育学研究, 53(3) : 248-260.

付記

本研究は千葉敬愛短期大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施された(課題番号:202101)。

本研究は私学事業団若手・女性研究者奨励金の助成を受けて実施された。

謝辞

本研究にご協力くださった、千葉敬愛短期大学附属幼稚園の皆様に、深く感謝申し上げます。